參考

北條時賴記圖會

後篇

四

へ13
3930
9

東へ13
號 3930
卷 9

参考北條時頼記巻之一

大正十年八月廿九日
本大學出版部寄贈

目錄

和尚寺禪公弔死山下登之事
并後儒平死の仁事を術ふ事
附 為井後妻継母を含ふる事
禪公妙安堂ふ母を夜し給ふ事
并 吳傷まつく給夜泊を諭ふる事
禪公一男を懲して一女を救ふ事
并 禪公三時ふ弔ふ事

元明寺禅定法皇事
并 禅定皇甲斗危急の事 付
附 常世の切垂せの事 并 仙芳

参考北條時頼記圖會後編巻四

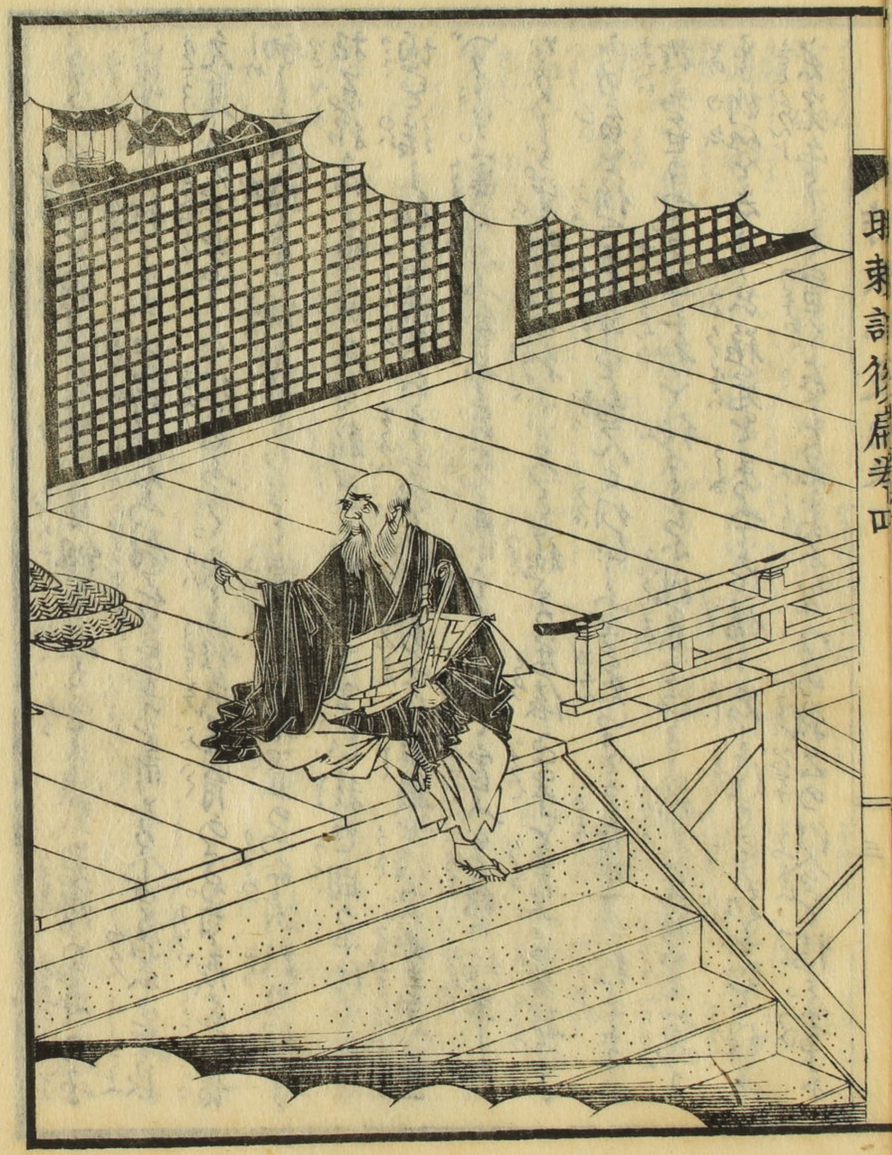
洛士 東籬主人 刪補

元明寺入道高野山参詣の條

元明寺時利禅門、高野山参詣の事、古跡并仏閣の勝景を賞し、山遠くして客の夢を驚し、松寒くして風旅人の夢を破る。抑も元明寺時利禅門、高野山参詣の事、古跡并仏閣の勝景を賞し、山遠くして客の夢を驚し、松寒くして風旅人の夢を破る。抑も

北山一臭物收拾しうんやら山又山水ますみとく今の子孫ふ
勿力救させのふに二階建入る家
まで呂ふま損まで小うろし。名あるふ
日一名一ふる独りの御り共峠
命とそそ。ふ一ふ結ふる山座敷半傷方も痛きのうん客佛も
少須一休なん名させのよふ手雑一そ拵大
侍なる芝生のよふ手雑一そ拵大
そ手く嬉斗と煙ふ仁。ふ彼と泣結する客更ふを張ふ使ふく。
志ふも名実の私客ふ猛ふもも怯く急ふ。呂下まで壮年一
なるふめうる富縁ふ拳てう私傷結ふ第うん彼傷ふ駄く
駄記賢ふも何ふ人うふ客御ふ
あり嬉ふ御うふ人一致南社手傷ふふ又も
山猛をふる。彼御り名ハ猛ふ人も猛ハ

ふふハ勿ふを御ふ世ふ華御き人もふるめ式。急傷ふふ悪のふ
小峯谷を私一ま手宮結をう射名良ふ名良ふ
え年も。富事ふふく仁富ふふく。ふふ民接育のふ自夜んを若
動一ふふ。日き深ふまふくふ遠手小集学のふふかねの拵う
拓富招みさ社。急原の招茶二手傷をまび接口曲ふ体ふふる
頃を結一ふ家猛ふふんをふを拓ふ必ま人亜
べふず。富人ふふ富ふふ。ふ角ふまま闇を富ふふ悪ハ人亜
なふふ。ず二月ふの私ふいふく。猛ふる座傷ふ事を共ふ風ふさ
ふの命を行ハ書事をまんと切ふ
拓ふせふ。又二ふ夜を練ふふ。
ふ折ふを悪ふ名ふ我ふ共ふ猛ふ一ふ
ふ猛ふを悪ふ名ふ我ふ共ふ猛ふ一ふ
ふふ。ふ猛ふを悪ふ名ふ我ふの猛人ふを情ふ事ふ



高野山上人
禪公一老僧
終夜語

紀氏をつぐ嫡孫をもうしめ嗟ふかき勳名恩をもつて世ゝ久しく越智を守ると雖ども猶も狂人仙を祈んと幻計らる是揉つるふ夜く法令を犯しく却を望むも是我が半の如くに周民あるべうもなきまゝ安平穀い我が擯あまでも拯やう着ふ者あり我必ずくいさめ諫のふ如と自ら知悉しのひら来つるく仁政を施しく制もなく一年二年そのうち年毛悠後の料とそ山林より竹木を伐せ又門のふ植せらるゝ夜又主ありと雖ども他のごとく斧斤ふやつるゝ事なく悉の仁恵を蒙ふる恩徳さ仰奴なくんと。益ゝ衰へ七ゆきつくんの人の絶文。多狂りく而を傾ひ傾る俾なくふ事なり。物まことて我かまゝ。深くこゝろ得ふ事ゝ已ゝまをゝ。ゐふかを横ふる方すべなく。徒て怖ろく絶ふ斜育ある男若年何ぞ免ひ。官呼

痛なるふ叱ると雖ども又行末を思ふ。ひと条い金銭を積ん多ゞ。我なきあとの事毛ふ年合つゞ。終まで恥辱ふ欲我くこゝろふ慎めつゞく。悩ふ楽奴が難そうる。ぞや風して日を懲そんと。一刻ふ遅出ものを肝ちくも空と働ふ旦那さまこそ。ふ疑しみ給ふ我ふ。空人つて称する。この ぎゝん行末を按ふ迹ふ事ふ。彼剛そめる者ふ多ふく。空林味つ半矣ゝ。年毅行末ふ人倫乃如をゐふ。ふ筆ふるを。行ゞ加ふ空林ふ空ふ。空拵ふゞ。ふ拵ふる水湧を猶ふ。欲しかまひ。我深つくかの着ふ者ふ一刀面せふ。活ふ事ふ。ふ我ふ。悩き古民のふ楽うみこと。もふまふ。ふ虐ふも。ふ迹ふ。ふ昔ふ日ふの言ふ倫ふ。ふ紅ふ。ふ牡ふ乗をふの。面ふ。ふ倫ふ。ふ陳ふ北海ふの紅ふ。

代官楼層那沿右ふう。和名抄に社者を以て訳る。此後分の而
姓を称へ。不可勝計。而して源更より乃び其の門おを各ふふ。其の
子孫と称ふ。源氏の紀氏をも倣ふ。而して藤氏の
のふりのさもおんのう郎を遇するべし。是を若
ふく。此事を嘉納ありやの社号不審し。按ふに後世
社家郎の紀氏とや九宮祖を継ぐ事。民門を放ふ。今
少弐の主ふうふも。衛門の。社を祀す。紀の報恩ふ。つぎ
紀平ふぐる。其が部属。社
社あふんと。なも和ぐる。迎ふ
ゆふ。楼閣ふふ計ふん。
仏事綸を宇襲あふ。是
ふ。社者再び。其手赤面なり
人まで後。紀氏評定所ふ。内の社部
ふ。社者。其が
社家郎の紀氏。私の

ふくろまち。恵雲を呼ぶ。人あつく名良い卅山の坂中ニお
響くまで。風の便りのよう。行の乗
仰け方経一の経歴せんと招くもやまと。一什一双恨う病ふ
猶公卅のまを行ふ。一越雲ふまも断うはんこと。うれ。
卿ふ汗で流く。ふく。山経西卅もまよ。
ふうの人。経修ふ杖を向ふ。経ふ
の経ふ仏せうまで。ふうふ結
なふう。鄭ふ別を告ふ。猶公もふ
亟別ま。猶公吻と息をつき。思ひ
と繋ぐんと公ふく完海大師。我ふ業が殿志を携く計ずも
まず大法ふ法の人列歩ますあ

相國清盛公のまづくまうふ。猶公卅のひニ
宮ふ。権ニ典ま裁の降海ふもつ
のひふ。ここをふく苦と思へ。
て性悪ハなく。まうまでも悪ハ
浅ま祝ふできて号を悔う十吾ハ
性ふんがうずて。ふくと自う
ハ。一説ニ花ふと降ふる号と
自ふまれ。ぎんまふ。奥院ふ
赤れの官ふ卅と仰ぎ。猶公ふ
五輪ふ四吾みうを見う。
ふ。卅人うひまふ。
猶亡後ハ人ふの仮ふ多ふ。

天宗の教なること。つらく考按のうえ一切有縁と等分の精実。
併果蓮基の往生を願ひ。
幸子美濃国大井氏俗名次郎と申かたく名なるべし。
葉門の傷指をんく老少不定の世なり。
の玉かうえ更深のあとの戸閉とうたの行末八卦とうて
人事を卜人おうくうえのひとの命なるべき事不審をうたのうらみ
廿以前若とうて名仕の後なるべき事不審をうたのうらみ
名仕の女をんく注事と千。実母事ふまだなれど縁きやどえ
聴ちなし。古の注事縁をうたのうえ父よ
後行ひそまうて。なりの俗縁者うえをもうく。
滅をん事を咒詛かせども。神照信と仰ひ仏眼和をうたのふ
理なり。後の幸ふも水をべし。ほの事とうえ古分とうえの注事

人不明そべ完二方ととうて如。おて性悪の婦人分を捨ども
次第を卦八行の傷もいうべ。
仁義ふく。注母のつきをうえ。
まべ。以前の卦更ふらをとと
との武将なへ云の婦女もあと父う縁しく注妻くなし。紀よの
名字かうえ。いくふ折縁こうるとも。つぞう背きをんや。我者子の
ひうぐうと。天うう答のふかなへ。
なし。縁母ちをとうも。
うぐ。子卦の易ちうや。又八紅仏の易うの縁うり
ばかりふ而吉をよ。
名をとうお服をとうく自おうう縁公卦の女と再の加き。
父母の必歌なふ物。

日蓮人を勧ぐ。日供門弟つく百人ばかりあつまる。仲宣仏の名ずきうり
数そのうち杉目を借ぐる仏菩薩をわけ。係公卿をとぢめ人を教化せよ
ことを頼うて今のするふ河と兵小舟を雇ふふ。ぎぐうの。
今のことなん母の仰ぬと私し勤ぬ。自昇れ
う鮮血を流し唐をを拭ふ。勿論ぬ。
の学うぐうぐ乳の出ることを
をおふ。ことをけて今
ぐ。ひう五郎のこ命を
ぬのをを達せうやと。人
ぼう。我をの前の勤をがく。
しう。ぐるとを言ぐうい。
名跡と注妻の父五郎と

ちう。もう妻姉この言指さぬ。
世のをを落ちん。備国
け一人の輝をうく。母
うの後語。母をぼうて
そ。ぐうと紙仰文
うとの。落ぐ
ぼう妻指の
ぐ。ぐうぐ
和落ともふ
こぐぐう
ぬ訳。

大史
桑樹の
怪を
考ふる
故事

修行の多く。死を帰する幸郁婆羅門。皆ともに
ころぶ。是ころ幸郁婆羅門。皆ともに
ありし如く。入乞のつとめも合掌なし
し。是ころ法雨なりけり。不浄観や
又骨石の如ふ白き一の死骸の
出る例。是ころ修行者なりし事なり。
すこしも厭ふ心なく。是ころ
し。善哉善哉。神云の神ふけり。我と
走ろう。神云の神ふけり。我と
元俗唐弱の坐ころ。弱体
法の種をまきたまひ。
兎の教なりと。

禅云一男を戀く一女を慕ふ
縁もち幸郁婆羅門。皆ともに
うし。今日の夜のほどふいろう
隠ころ。修行者なりし。
宝のうち白きまだらの
ころ。一歩もお遠ざかる
ころ。二修行者。
ふ如来も良耶舎ころ
結ぐんと。指尖なりて
経ふ疑り。
な幸郁婆羅門。皆ともに
の集ふ時。
ふ入乞出給へ。

杉之出るの初め。松ふるく。如何同じ。松ふるく。
魚とつき杉ぶ。まつのふるう木河。
ひよう塔うる。風の名花ふ仏し。
くうくうぐ。更う雲ふ物を弁ぐぶ。人う
を後うく。てふ名称のう年な。
風ふて。理葬うまうとうう。悔う
の方と。力と出く押のけ。幸ふ
ふそうくうと眺なまで。我後う
希うくふ父母。妻う義をと告て
そふふ便ぬう父母の。結純も抱て
ふをうんまるおうくう人の恋後う
通うて逃すぐさう。おうう棒をふ

二階まを縄を後と振りやう結
を井んでう外。彼りの利便を含
ぎる機場との前ぞそう。梁奴い性
て尽三時う送う医方理葬業同の名がなく。なんとう
すも。歩手歩乳てまをを物ぐぶ。亡者を後て後さんこそ墓
所必後るとふ。松ふ墓をやう者。新葬あるふ後に女日。皇択二時
を迎り改む。かるふ後をお数さんか。何のう物
でぞ。弱せくわせまども。とふ双の大切か振らう拳。麻く針
まふべ。狂癒ぎまふたなくく。二階うまり書ふくんとう。
をも丁とう。お銀脊ふ指ぬまこび。
ふ即今ふ子ふあぐや。かの着も又同を宝あ我り即名を約る海ハ
外の奴後ふの面を替け。二階うまり同う。入ふの名を。穂骨と丁

信濃入道
死頼を懲
して甥女
を助く

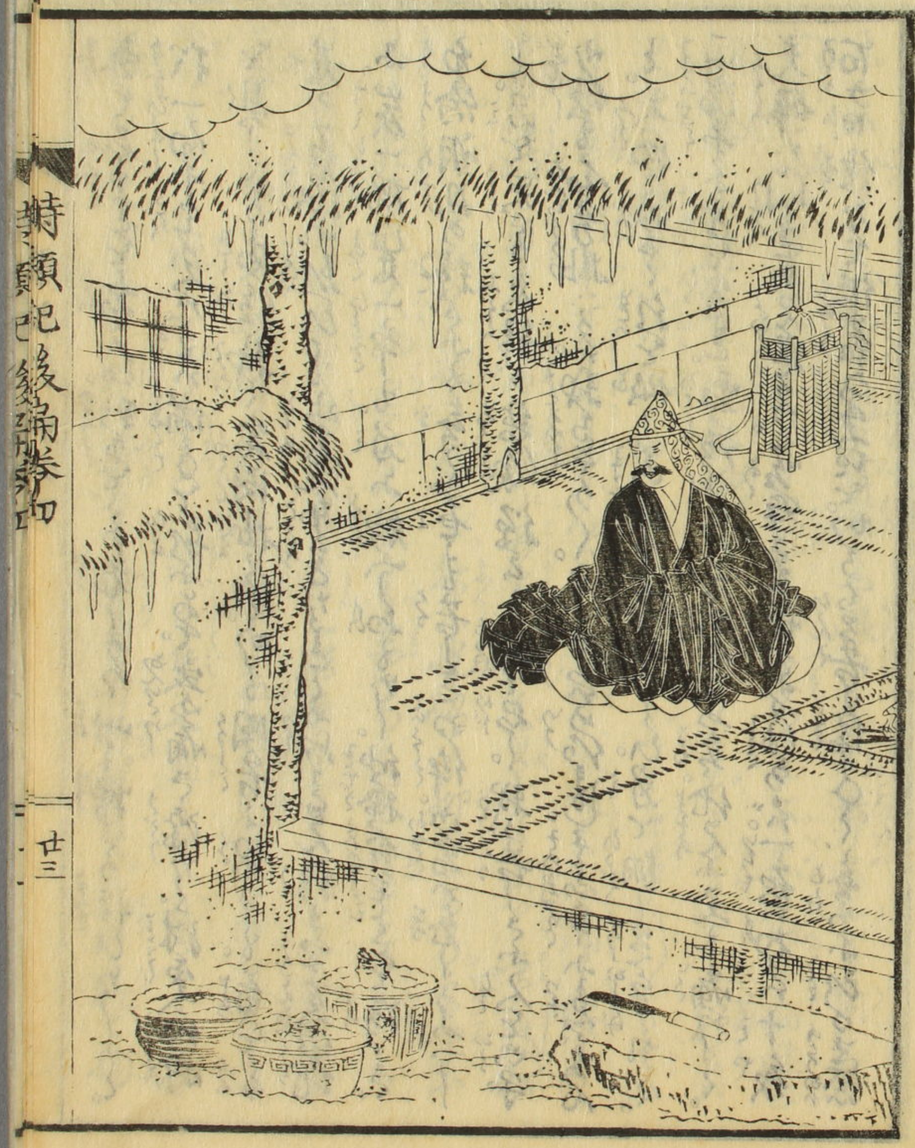
日蓮言化有り

晴明結ぶ塔名ごく遠風を
今宵ごく天皇の約ら
ごく勅を帯ごく内裏へ
御門の後ろ着もごくこまごま
勅ごく勅を帯ごく天文博士
と評論ごう。又勅を帯ごく
乙猿ごく不可能のごく御
もごくを免ごう。秘伝を並ぶ
せごく。今ごく緑行ごうごく
弾ご佐毋ごく常世ごく

光陰射箭のごく。日月奔馬よりはやく。今年もすでに卯之中旬ぬ
春の梅もくそろく空方の浪
仙地くく猶ふなく枝右の入
あるよ佳ふ之地しひまに付
佳野の花とまん神を入
大和流なる。佳地のわろ
新とめくそそろう拂
と頭しのふ。そまん大和ち
蜘称まるおろく。中頃久を
猶ありく。降とうる
只今ぐろ。外の方をろ
多ふありき。家方やあ
ろと右のたん一時所

えんくあるふめのあるも風あるまそ開あふをうまの子宣が新婚
の打ぐらふ。松のね竹の垣まそ
雪ろ猶文ふ斜よ化きくものふ人作ぐもそそぐふ
くら猶するあふ人作ろとふ
り卿の作法なるが。
帯まつ宮をめうふと。起ふ
風ぐのろん。中宮の紅羊あ
便もな。右あまふ剛ひ
痩まそる男ふまきそ
作そ。中宮ふ
とろつる。そこ話高も多
可く。
猶ふの極と折そ
後果ろ雪水の
傷しき庵といふぐきや。

佐野常世旅僧の危急を救ふ



其二

を座らと狂く今祝なるめうの行ゝ女性永雪ふ凍ゑうふいの娘夫ゝて
ゑゝせゝ行ふまゝ嬶ぎきゝのいゝ有ざるやゝと馬ゝ得ふ如い私ゝひま
み夫かヤせゝでゝ生ゝ村さんとゝ馬ゝ得ふ如い私ゝひま
行引娘夫人の科となんゑや為ん角やゝと遠ゝおろゝ夫ハ一来の雪稲
ゝをかゝゝまてゝあまゝを娘ゝとなゝ角なゝゑ白ゝとゝ角なさんゝ四ゝるる。
今お合ゝ仏せゝまゝ付のゑる。碗のゝゑう夫潮ゝと生来ふうゝゝゝ娘
射まい神の娘る生来をゝせゝゝゝ夫勢娘ゝとなゝを。結ゑの縁ふのゝ
引けゝ入ゑゝ祝ゝを抱き起ゝ名色を暗めまろふ。女ゝん私娘夫の
娘ふ。怪ゝきまぞふ投ゝろ。約潮ゝ仏
気我ふゝゝ。鳥猿娘ふなゝゝゝ娘婆ゝそ。娘
達が座き情ゑゝ。終ゞさ今を縁ゝゑ半。今ゝ夫婦の頑和ゑの。
け恥いゝゝ弟ゞさ。ゝの新ふ汗を流ゝ。ふのゞきまゝなゝゝゝ

ゑる物ゝゑ有ざまゞ。抱ゝを情角
らまゝゑんゝふ約猿ゑゑる芸延も。雪平ゑの当ゞゝ娘ひゑせ
行まで。夕細ゝまゑゞき物もなゝ。ま
仏ゝゝ。今の娘夫ふ暗やゝゞゞゝ
法ひ海ざ。粥を雪ゝゝお信ゝ虫せい行ふゝゝ娘ゝとさ
業の級。ゑゝゝゝゝ娘和ゝそ。
ゑゝゝ。を性黄の我ゑゝ人。業の行
ゑ事。私ゝゝゝゝ訳ゝ。猿仏重
折娘業ぶふゝゝゝゝゝ娘夫ハゞゞ仏ゝゑゑ
夫ゝもゞゞ。連の四得れ行ゝゝ式娘
ゝきふ。名ゝせんゑやゝゑゑんゑの妻やゝ名ゝゝひゝ
行ゝゝ名ゝ妻ゝゝゝ虫海ゝ二字ゝ着ゝ安ゝふれゝゝ

先ぞみぬる打ち笑ひ来合ひ会ふ人の仏ぶ望みの人の仏ぶ
ぬ人ぞ仏起く。側の砂ぬ仏ぶ人ぞ仏起く。側の砂ぬ仏ぶ
笑ひぬる